

## 船舶インシデント調査報告書

令和5年10月25日  
運輸安全委員会（海事専門部会）議決

インシデント種類	運航不能（燃料供給不能）
発生日時	令和5年1月20日 11時30分ごろ
発生場所	北海道枝幸町枝幸港東北東方沖 北見神威灯台から真方位088°23.5海里付近 （概位 北緯45°04.4′ 東経143°15.0′）
インシデントの概要	漁船第八龍寶丸は、漁場の移動中、燃料油の移送ができなくなり、運航不能となった。
インシデント調査の経過	令和5年1月24日、主管調査官（函館事務所）を指名 原因関係者から意見聴取手続実施済
事実情報 船種船名、総トン数 船舶番号、船舶所有者等	漁船 第八龍寶丸、125トン HK1-1351（漁船登録番号）、合名会社枝幸水産商会 ディーゼル機関、船内機、4サイクル、出力735kW、回転数毎 分750、6気筒、ボア260mm、使用燃料A重油、平成15年 10月機関製造、平成16年1月進水
乗組員等に関する情報	船長、五級（航海）（履歴限定） 機関長、四級（機関）（機関限定）
負傷者	なし
損傷	なし
気象・海象	気象：天気 雪、風向 北西、風力 5、視程 約15km 海象：波高 約1m
インシデントの経過	<p>本船は、船長、漁労長及び機関長ほか11人が乗り組み、2回目の操業を終え、次の漁場に向けて移動を開始した。</p> <p>機関長は、機関室で当直中、燃料油サービスタンクの残量が少ないことに気付き、燃料油サービスポンプが運転されているにもかかわらず燃料油が‘船底等に配置されている複数の燃料油貯蔵タンク’（以下「貯蔵タンク」という。）から移送できていないことを知った。</p> <p>機関長は、船内電源を供給している発電機の運転を温存する目的で主機を停止した後、操舵室に行って船長及び漁労長に状況を報告した。</p> <p>船長及び漁労長は、自力での運航を諦め、衛星電話を用いて船舶所有者に報告するとともに、118番通報を行って救援を要請した。</p> <p>本船は、来援した巡視船により定係港である枝幸港に向けてえい航が開始され、同港沖で船舶所有者が手配した引船にえい航が引き継がれた後、同港の岸壁に到着した。</p> <p>本船は、着岸中、船舶修繕会社（以下「A社」という。）の担当者が訪問して調査し、‘燃料油サービスポンプの出口側に装備されてい</p>

	<p>る燃料油流量計’（以下「本件流量計」という。）の入口部に貯蔵タンクから流出したと思われる綿ゴミの様なスラッジが堆積して閉塞していることが分かり、同部の掃除後に燃料油が正常に移送できるようになった。</p> <p>本船は、貯蔵タンクから燃料油サービスポンプを用いて燃料油サービスタンクに隣接した燃料油セットリングタンクに燃料油が移送され、両タンクの間を結ぶ交通管の弁を常時開放することにより燃料油サービスタンクに燃料油が重力で補充されるように運用していた。</p> <p>本船は、燃料油サービスポンプの入口にこし器が装備されており、月に一回程度、フィルタの掃除を行っており、フィルタの汚れ具合に異状がなかった。</p> <p>本船は、建造後約19年経過しており、定期的な検査時に貯蔵タンクの内部点検及び掃除が行われていた。</p> <p>A社担当者等は、本インシデント時、本件流量計自体が一時的に不調となった可能性があるかと判断し、後日、新品の同型流量計（油用ルーツ式容積型流量計）と交換するとともに、不調の再発に備えてバイパス配管を敷設した。</p>
<p><b>分析</b></p>	<p>本船は、貯蔵タンクの掃除を定期的な検査時に行っていたものの、本件流量計の入口部の配管内でスラッジが経年により堆積した、又は本件流量計が一時的に不調となったことから、燃料油が本件流量計を通過しなくなり、燃料油の移送ができなくなって運航不能となった可能性があると考えられる。</p>
<p><b>原因</b></p>	<p>本インシデントは、本船が、貯蔵タンクの掃除を定期的な検査時に行っていたものの、本件流量計の入口部の配管内でスラッジが経年により堆積した、又は本件流量計が一時的に不調となったため、燃料油が本件流量計を通過しなくなり、燃料油の移送ができなくなったことにより発生した可能性があると考えられる。</p>
<p><b>再発防止策</b></p>	<p>今後の同種事故等の再発防止に役立つ事項として、次のことが考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・船舶所有者及び機関取扱者は、燃料油流量計を定期的に取り外して入口管等の状況を点検し、燃料油流量計を定期的な陸揚げして整備を行うことが望ましい。</li> <li>・機関取扱者は、船底にある燃料油貯蔵タンク内からの燃料油移送を可能な限り海象が平穏なときに行い、タンク底部のスラッジを燃料油供給配管内に入り込ませないようにすることが望ましい。</li> </ul>